

『住吉物語』と『秋月物語』・『伏屋物語』

—— パソコンによる同文節比較から ——

武 山 隆 昭

一、はじめに

継子物語の系譜をたどる一環として、平安時代の『住吉物語』^(注1)と室町時代の『秋月物語』^(注2)『伏屋物語』^(注3)の比較考察を試みた。『秋月』・『伏屋』が、話の筋だけでなく表現でも『住吉』の影響を強く受けていることを、具体的に示すことが本稿の目的である。また、パソコンを用いて同一文節を検索するという新しい方法についても、今後一つの「研究方法論」として確立してゆきたいと考えており、その中間報告でもある。大方の御批判・御教示を仰ぎたい。

採り上げるテキストは、諸本を網羅するのが望ましく、稿者の『住吉』に関する諸論考も、出来るだけ多くの伝本を比較校合しながら論じてきたつもりである。しかし、今回はパソコンを利用する便宜上、一本ずつにせざるを得なかった。それぞれ現存本中の代表的なものを探り上げたつもりではあるが、限定された範囲内での推論にすぎないことは承知している。それでも一つの傾向は表れるはずであり、数値およびそれに基づく考察は、それなりの意義を持

つと考える。

今回使用したテキストを紹介する。『住吉』は、契沖本とした。桑原博史氏の六分類^(注4)の第四類に属し、広本系と流布本系の中間に位置する。国立国会図書館蔵写本を主底本として初雁文庫本・静嘉堂文庫本で誤脱を補訂した本文を使用した。^(注5)『秋月』では、高山歆喜寺蔵写本(室町時代物語大成第一所収)を用いた。伝本中最も分量が多いので、他作品と比べるのに都合がよいと考えたからである。^(注6)『伏屋』は、慶応義塾図書館蔵写本(室町時代物語大成第十一所収)を用いた。尊経閣文庫蔵本の方が古態を残していると思うが中間にかなり長い欠落があるので、慶応本の方とし適宜尊経閣本を参照することとした。ところが、この慶応本にも虫蝕や破損があり翻刻が□印となっている箇所^(注7)がかなりある。この□部分を、他本を参照しながら私に補訂したものをテキストとした。

二、筋の展開の類似点と相違点

次に示す〔表Ⅰ〕は、『住吉物語』の筋の展開を、(二)～(五五)に切って示した項目のそれぞれに該当する『秋月物語』『伏屋物語』の内容を短く記して、上下に対照するために作成したものである。『秋月』『伏屋』の列の(一)内が漢数字になっている項目は、『住吉』に対応していることを示す。また、(一)内が算用数字になっているところは、『住吉』に対応していないことを示している。ただし、『秋月』と『伏屋』とが対応している箇所もある。また、物語の展開から見て順序が違うので漢数字にはしなかったが、内容的に対応が認められる箇所には、(↓漢数字)で該当項目を示した。

〔表Ⅰ〕によると、漢数字で示した項目数は『秋月』三十三、(60%)『伏屋』三十一(38%)となり、話の筋の展

表1 『住吉物語』と『秋月物語』・『伏屋物語』における筋の展開の類似点と相違点

『住吉物語』(契沖本)	『秋月物語』(高山歎喜寺本)	『伏屋物語』(慶應義塾図書館本)
<p>(一) 昔中納言兼左衛門督がいた。</p> <p>(二) 妻が二人あった。Aは式部大輔の女、Bは古き宮であった。</p> <p>(三) Aには二人(中君・三君)、Bには一人の姫君が生まれた。</p> <p>(四) 姫君が八歳の時、母宮(=B)は中納言に姫の入内を遺言して病死する。</p> <p>(五) 中納言は北の方(=A)と住む。姫君は乳母が養育する。</p> <p>(六) 姫君が十余りになった時、乳母の進言で姫君を中納言邸に引き取る。</p> <p>(七) 姫君は、中君・三君と親しむ。(継母と同居)</p> <p>(八) 姫君には、乳母子で侍従という忠実な後見役がいる。</p> <p>(九) 中納言は、西の対をしつらいて姫君を住まわせる。</p> <p>(一〇) むかひ腹の中君は兵衛佐と結婚する</p> <p>(一一) 右大臣(のち関白)の子四位の少將が、下仕の筑前から姫君の噂を聞き、心を引かれる。</p> <p>(一二) 筑前少將の文を携え姫君のもとに届ける。</p> <p>(一三) 姫君文を見ない。</p> <p>(一四) 少將筑前から姫君の美しさを聞き、さらに強く心を引かれる。</p> <p>(一五) 少將は筑前に託し次々に文を送るが返事はない。</p>	<p>(一) いづれの時にか都に京極の大納言がいた。</p> <p>(二) 北の方は、源中納言の妹であった。</p> <p>(三) その中に一人の姫君(愛敬の君)が生まれた。</p> <p>(四) 姫君が七歳の時、母北の方が病死する。(大納言に姫の入内を遺言する。記述は後に出てくる)</p> <p>(五) 三年後、三条宰相未亡人を迎える。愛敬と同じ年頃の連れ子(愛子の君)がいた。</p> <p>(六) 愛敬は、愛子と親しむ。</p> <p>(七) 愛敬には、乳母の第式の局や三位の局が後見役で、親身になって世話している。</p> <p>(八) 大納言は、月見の御所を玉みがきにして十二人の女房をつけて愛敬を住まわせる。</p> <p>(九) 愛子は南の対に住み同じ様にかしづかれる。</p> <p>(一〇) 関白の子二位の中將が太秦に籠もり隣の局の愛敬を見初める。(一二二)</p> <p>(一一) 下仕の白河に託して、中將は文を愛敬に送る。</p> <p>(一二) 大式の乳母は文を即刻白河に返す。</p>	<p>(一) 昔、都に播磨の少將源忠房がいた。</p> <p>(二) 北の方は、二条中納言の姫君であった。</p> <p>(三) その中に一人の姫君(にほひの君)が生まれた。</p> <p>(四) 姫君が七歳の時、母北の方が病死する。</p> <p>(五) 姫君を、乳母のこたかきや多くの女房たちが親身になって世話をしている忠房は三年あまり後、五条宰相の未亡人を迎える。新北の方には、にほひ姫の一歳上の連れ子(あいし姫)がいた。</p> <p>(六) にほひ姫は、あいし姫と親しむ。</p> <p>(七) にほひ姫は、超美人で性格抜群、芸能信仰等全ての点で優れている。</p> <p>(八) にほひ姫は、母の墓に参りなどして慕う。</p> <p>(九) (一三) 三位中將の子少將(廿二)が、清水参詣のあいし(十五)にほひ(十四)を見、より美しいにほひを見初める。</p> <p>(一二) 越路丸という童に託して、少將は文を送る。</p> <p>(一三) 越路丸は文の取り次ぎを、あいしの下仕えまがきに頼む。</p>

- (一六) これを継母が知り、筑前を買収し、少將の手紙を三君に届けさせる。
- (一七) 三君、母に強要され少將に返事を書く。
- (一八) 少將、三君と結婚し通う。
- (一九) 少將、琴の音がきっかけて人違いに氣付く。
- (二〇) 少將、侍従に託し姫君に文を送るが返事はない。
- (二一) 正月二十日過ぎに、三姉妹が嵯峨野へ遊びに出かける。
- (二二) 少將は、先に嵯峨野に行き、隠れて姫君を見、その美しさに我を忘れるほどとなる。
- (二三) 少將、思いの丈を繰り返し文に書き侍従に託し姫君に届けるが返事はない
- (二四) 姫君の乳母(侍従の母)が死ぬ。
- (二五) 姫君、侍従に勧められ初めて少將の文に返事を書き、以後は書かない。
- (二六) 少將は、三君や侍従に出家を仄めかしたりする。
- (二七) 中納言は、故母宮の遺言を守るため姫君を五節の舞姫に出そうと準備するが継母は協力しない。
- (二八) 継母は、三君の乳母(心むくつけき女)と謀り、姫君に六角堂の法師が通っていると言言する。
- (二九) 中納言は、姫君を五節に出す事を思いとどまる。
- (三〇) 継母讒言の子細を、心寄せの式部から聞いた姫君は出家を思うが、父を思い果たせない。
- (三一) 中納言は、姫君と内大臣の子宰相兼左兵衛督との縁談を進める。
- (一六) これを継母が知り、かはらの局と謀り、白河を買収し、中將の手紙を愛子に届けさせる。
- (一七) 愛子、母に強要され中將に返事を書く。
- (一八) 中將、程なく愛子と結婚するが、見し人にてはなしと氣付く。だが愛子をもなつかしく感じる。
- (一九) 中將、月見から聞こえる琴の音により、人違いを確認する。愛子は氣付かない。
- (二〇) 中將は、清水寺に参詣し、行家がこふる君にあひ見む事……と祈る。
- (二一) 中將は、愛子に出家を仄めかす。(↓二六)
- (二二) 愛子の女房藻塩の前・尾張の君が、中將の物思ひは初めよりの月見への心ざしを北の方の計らいで愛子に取り違えさせた事に因ると教える。
- (二三) 愛子は、訪れた中將にどうして今まで包み隠していたのかと詰り、愛敬への仲立ちを申し出る。
- (二四) 愛子は、大宮の中將と申すめでたき人が愛敬のことを深く思ひ召している旨を伝える。
- (二五) 北の方は、かはらの局と心を合わせあやしき法師が夜な夜な愛敬の所に通っていると言言する。
- (二六) 大納言は、愛敬の内参りを思いとどまる。
- (二七) 愛子は、中將の文を度々愛敬に届けるが、愛敬は返事を書かない。(↓二三)
- (二八) 愛子はついに非常手段に訴え中將を愛敬の寢室に導く。中將は愛子に氣兼ね
- (一六) これを継母が知り、あいの乳母の靱負局と謀り越路丸を買収し、にほひが瘡病などと言って、少將があいに文を書くように説得を依頼する。
- (一七) 少將はいかなる病なりとものにほひに懸想しつづける。
- (一八) 少將は隙なく文を通わせ、やがて忍びににほひに通い始める。

* 父の少將は、昼寝の夢に空から吹き来る風に姫君を取られると見る。心配して継母に相談するが継母は取

- (三二) 継母は、又この事を妬んで、むくつけ女の兄で七十ばかりの主計助に姫君を盗ませようとする。
- (三三) この奸計を心寄せの式部から知らされた姫君は、家出を決意する。
- (三四) 故母宮の乳母が尼になって住吉に住んでいるのを思い出し、迎えを依頼する文を書く。
- (三五) 姫君と侍従は、上京した尼に伴われ住吉に着く。
- (三六) 姫君の失踪を知り、中納言・少將・中君三君など大いに悲しむ。
- (三七) 姫君、命ありとばかり知らせ奉らむと言つて都の父中納言に文を届ける。
- (三八) 姫君の生存を知つた少將は、長谷寺に籠もり七日間一心に祈念した結果、住吉にとの示現を得る。
- (三九) 少將は、供人を都に返し隨身一人を伴つて徒歩で住吉に向かう。
- (四〇) 姫君も、同じ日の曉少將を夢に見る。
- (四一) 少將、松原で十四五ばかりの童に道を教えられ姫君の居所を尋ね当てるが、侍従は姫の不在を言う。
- (四二) 尼君の配慮で、少將はようやく姫君の部屋に通され契りを結ぶ。
- (四三) 少將の住吉滞在を、あたりの人などが周辺に住む者が聞きつけ、参集し酒を飲み遊ぶ。
- (四四) 父関白の命令で少將を迎えに來た人々と、海浜で管弦や海士の潜きを見たりして遊ぶ。

- ねしつて愛敬に通う。
- (三二) 継母は、中將が愛敬に通う事を妬んで、二人の武士を語らい愛敬を殺させる計画を立てる。
- (三三) 父大納言が宮中の最勝講に参内中、武士二人が乱入し愛敬を奪い去る。
- (三四) 武士達は、瀬戸内海の島で愛敬を海に沈めて逃げる。大海亀が愛敬を島に助け上げる。
- (三五) 愛敬は、熊野詣で帰途の秋月の尼君の船に救われ、伴われて筑後の国秋月の里に着く。尼君は権現の利生に依つて娘を授かつたと喜びかしづく。
- (三六) 大納言・中將など、大いに悲しみ、十方を探すが何の手がかりもない。
- (三八) 中將は、清水寺に参籠し、七日目の曉に夢の告げで、愛敬が西方にいる事を知る。
- (三九) 中將は、山伏姿で一人下向、兵庫の港で出会つた冠者とともに九州へ向かい、旅を続ける。
- (四〇) 愛敬、夢に中將が我を尋ねて旅するを見る。
- (四一) 冠者、愛敬の居場所を教え鳥になり飛び去る。中將は秋月の御所に着くが入れもらえない。
- (四二) ゆふの前・尼君の配慮で、中將は愛敬の部屋に通され再会する。
- (四三) 中將の秋月來訪を知つた大式や九国の守などが秋月に馳せ参じ饗飯をする。
- (四四) 管弦講・御所的・鷹狩などを催す。

- り合わない。
- (三二) 継母は、少將がにほひに通う事を妬んで、武士を語らい、にほひを殺させる計画を立てる。*
- (三三) 父少將が殿上に参内中、武士二人が乱入しにほひを奪い去る。
- (三四) 武士達は、にほひを琵琶湖に沈めて逃げ去る。故母が龜になり、姫を瀬田唐橋の上に助け上げる。
- (三五) にほひは、熊野詣で帰途の伏屋の尼君に救われて、信濃の国伏屋の里に着く。尼君は熊野権現の利生に依つて娘を授かつたと喜びかしづく。
- (三六) 父少將・夫少將などは、大いに悲しみ、にほひの菩提を弔う。
- (三八) 少將は、住吉明神に参籠し、七日目の曉に夢のお告げで、にほひが東の方にいる事を知る。
- (三九) 少將は、山伏姿で一人下向、大津の港で出会つた翁とともに東国へ向かい、尾張・遠江と旅を続ける。
- (四〇) にほひ、夢に母がめでたき事ありと教うと見る。
- (四一) 伏屋に着いた時、翁は我こそ住吉明神と名乗り、にほひの居場所を教え、夢のように消え去る。少將、伏屋尼の家に行き、姫の琴を聞く。
- (四二) 少將、姫君の配慮でにほひと再会する。
- (四三) 少將、信濃の国の国司に上京の供人を依頼する。

(四五) 少將は、姫君を田舎人の娘と称して伴い、上洛する。

(四六) 関白夫妻は喜んで、北の対をしつらえて姫君を住ませる。

(四七) 姫君は、こうしている事を父中納言に知らせたいと言うが、少將は、時が来るまで待てと言つて許さない。

(四八) 姫君は、引き続いて若君・ひめ君を産む。

(四九) 若君七歳、ひめ君五歳になった八月二人の袴着を催し、袴親を頼んだ中納言と再会する。

(五〇) 継母の行状を知った中納言は、継母と離縁し三条堀川に移り住む。

(五一) 少將は叔母の対の御方を中納言の後添いにする。

(五二) 姫君は、夫兵衛佐に去られた中君と三君を引き取り、姉妹ともに仲良く暮らす。

(五三) 少將は関白となり、姫君は北の政所と呼ばれる。

(五四) ひめ君は后になり、若君は三位の中將となり、一族末繁盛でめでたくおはしける。

(五五) 継母は、人に恨まれ泣く泣く暮らしやがてはなくなる。むくつけ女はさまよいあるきけるとかや。

* 少將は(三八)の前で中將に、(四八)の前で中納言に、中納言も(四八)の前で大納言に昇進しているが、初出の官のままとした。

(四五) 中將は、愛敬と尼君を伴い、九国の武士七千五百九十三騎を従えて上洛する。

(四六) 愛敬を大宮(＝関白邸)に迎える。

(四七) 中將、秋月の尼君を厚遇する。

(四八) 愛子は母の仕業と知り恥ずかしさに家出する。北の方も罪を恥じてかはらの局と家出する。

(四九) 愛敬、父大納言と涙の対面をする。

(五〇) 中將・愛敬、清水寺にお礼の七日参籠をする。

(五一) 愛敬は、観音の利益で愛子の居所を知り、親しく語り合う。愛子は父大臣の跡を継ぎ栄える。

(五二) 中將は、大將になりやがて父から関白を譲られる。

(五三) 愛敬は北の政所となり、若君三人ひめ君二人生まれ、ひめ君は后に立つ。若君も殿上人中で優れ、帝の御おぼえもめでたい。

(五四) 北の方は、愛子のお蔭で捜し出され清水辺に御所を建ててもらう。

(五五) いづれも繁盛し、毎月十八日には清水に参り、いよいよ観音を信仰する。

* (一) 内の漢数字は、住吉物語に対応しているところ、アラビア数字は対応していないところである。

(四五) 少將は、にほひと尼君を伴い、信濃の武士三百余騎を従え上洛する。

(四六) 少將、上京後直ぐに帝王に報告する。

(四八) 継母を近江の湖に沈めよとの宣旨が下るが、にほひの配慮で継母は助けられる。

(四七) 尼君は、住み慣れた伏屋に戻る方がよいというので信濃・越後の莊園を贈呈し帰国させた。

(四九) にほひの父は、寺寺へ願果たしに参詣し、多くの寄進をする。

(五〇) 少將は姫と連れだって住吉へお礼の参籠をして、社等を寄進したりする。

(五三) 少將は帝から関白に任ぜられる。

(五四) にほひは、少將との間に若君三人ひめ君一人を儲け、若君は左大臣、少將などに、(ひめ君は東宮の中宮に)なつて一族栄える。

* (一) は尊経関本

(五五) その後、少將一家はそれぞれ現人神となつて衆生の願いを満たし給うたと言ひ伝えられている。

* (一) 内の漢数字は、住吉物語に対応しているところを示す。ただし、秋月物語に対応しているところもある。

開の類似度という点では、『住吉』と『秋月』が圧倒的に高い数値を示している。また、算用数字の項目同士で『秋月』『伏屋』に対応関係が認められるものが、11・33・34・50・56と五箇所あるので、『伏屋』から見た『秋月』との類似度は21+5を『伏屋』の項目数35で割った74%となり最も高い。(『伏屋』の(五)は『秋月』の(八)と対応するものと見なした) この結果は、『伏屋』プラス『住吉』イコール『秋月』といった図式を成り立たせる根拠となりうる。

さらに細かく言うならば、『秋月』のベースは『伏屋』で、その上に『住吉』を被せたものであり、桑原氏の「住吉とまったく同じ筋立てに伏屋の亀の出現の趣向を加えた」とする説は(注2)いかかと思う。その最も大きな根拠は、(時代の反映でもあるのだが)同時に二人の妻を持ちその中の一人が死亡して、忘れ形見の娘が継子苛めの対象となる平安時代型と、先妻の残した娘を後妻が苛める室町時代型とに、はっきりと分けられるからである。次の根拠は、『秋月』で、男主人公(中将)が「昔、すみよしの姫君のやうに、とりちかへてそ、あるらめと、おほしめし……」とある叙述である。これは、継子に求婚する貴公子を我が娘にすり替えて結婚させるといふ継母のたくらみの構想を『住吉』から借りてきたと自白しているのと同じだから。その他、能野詣でから帰る途中の富豪の尼公に救われること、姫を求めて旅する男君に付き添い居所を教える冠者・翁が仏神の化身であることなど、亡母が亀になって娘を助ける点も加え、根幹となっている筋立ては『伏屋』から『秋月』へであると思われる。

とは言え、『伏屋』も『住吉』の影響下に生まれた継子物語であることは論をまたないであろう。同じ室町時代の継子物語であっても、『鉢かづき』『姥かは』系とは異なり、恋愛譚的要素の強い「伏屋型」は、『住吉』の直系とも言える。女主人公の姫君が継母のために都から離れた所に流離し、男主人公が辛苦の末尋ねあてるといふ筋の根幹が一致しており、かつ物語の題名が姫君の流離・帯在地の名をとっている点も共通している。「表1」で、漢数字が三段通しになっているもの(共通話材)が二〇(36%)もあることがその証明である。その他、清水寺・長谷寺の観音

信仰、夢による示現、女主人公の弾く琴の役割など、構想上の共通項は多い。

これに対して相違点とは言えば、最も大きいのは、男主人公が女主人公を捜し求める旅の描写にある。『住吉』では、隨身一人だけを伴って初瀬から竜田山を越えて大阪市住吉区に向かう。ならば、徒歩で足に血をにじませて苦しい思いはするが、一日で尋ねあてている。一方、『秋月』では、清水観音の化身（＝冠者）に付添われてはいるものの京都から九州（福岡県甘木市）まで、『伏屋』では、住吉明神の化身である翁に付き添われてはいるものの、都から静岡・山梨経由で長野県下伊那郡阿智村まで、ともに数ヶ月の旅をしている。そして、この旅の描写が物語の半分近くのを占めているのである。このアンバランスとも思える道中記の詳しさは、後の『竹斎』などに続く時代の好尚を反映したものなのであろう。

また、同行の二人が和歌を詠み合いながら旅を続けるのも『秋月』『伏屋』に共通で、『住吉』には少将の独詠歌が三首あるのみである。その他、『住吉』には登場しない武士が登場する（特に『秋月』では後半御所的・雁狩りなど大活躍する）など、時代の反映が窺われる差違である。

三、共通する文節の比較

三物語を、語彙・表現の面から比較するために、それぞれの文節索引（注5・6・7）を作成した。同一表現・類似表現を比較するのに、単語索引より便利であると考えたからである。「KWIC索引」と呼ばれるもので、当該文節（見出しの文節）の前二文節・後三文節がタイプアウトされるので、語句の用いられ方を直ぐに知ることができる（注8）大変便利なのである。

『住吉物語』と『秋月物語』・『伏屋物語』

今回はその三物語文節索引を合併させて、いわば『住吉・秋月・伏屋物語対照文節索引』なるファイルを作成し、それを基に同一文節の検索を行い、降順に並べてプリントアウトしたもの（稿末「参考Ⅰ」参照）を基に以下の考察を行った。

その際に前もって三つの文節索引の作成基準の統一を行った。たとえば、「御」は『住吉』は平安時代ということでおホム『秋月』『伏屋』はオンとしてあったがオンに統一する、「候ふ」はサブラフに統一するといった操作を行い、改めてソートし直したものを使用した。ちなみに、各物語の文節数は、『住吉』六四九三、『秋月』一八九八三、『伏屋』六五九九である。これを一つのファイルに統合（MERGE）したものに、同一文節検索プログラムを実行させた。（『秋月』のソートを二十分で行うパソコンで、五時間五分かかった）その結果、七文節続いて同一表現であるものが、『秋月』『伏屋』に各一組あるのを筆頭に、五文節同一が四組、四文節同一が四五組、三文節同一が二四四組であった。二文節同一は約一五〇〇組あるがプリントアウトしなかった。二文節が同一というのは、偶然性にも左右させると考

表Ⅱ 三物語の同文節数Ⅱ親近度測定

三文節	四文節	五文節	七文節	同文節数	作品
19	4				住吉
146	29	4	1		秋月
26	6		1		伏屋
6	1				住秋
5					住伏
40	5				秋伏
2					住秋伏
244	45	4	2		

表Ⅲ 筋の展開段階別同文節数

(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	段階	作品
6 (0.46)	1 (0.08)	2 (0.11)	6 (0.32)	2 (0.4)		住吉
5 (1.25)	48 (0.74)	14 (1.17)	6 (0.38)	4 (1.6)		秋月
6 (2.0)	6 (1.47)	9 (1.6)	7 (1.4)	6 (2.0)		伏屋

表Ⅳ 同文節の描写内容による分類

三文節	四文節	五文節	七文節		
3	1				自然
101	22	2	1		行動
8	4	2			心理
104	14				状況
28	4		1		会話

えられるので、本稿では対象外とした。そこで、三文節以上同一のものについて、以下の考察を進める。

〔表Ⅱ〕は、三物語別に同文節数を集計したものである。これによると、同一作品の中で同一文節が表れることが異作品間に表れることよりも多く、作者の筆癖が影響する面が大きいと思われる。

たとえば、同一作品に同一文節が三つ以上表れるのを示すと、

「あかしくらし たまふ ほどに」(住吉、四回)

「いとど あはれぞ まさりける」秋月、三

「(と) いふ ところに おはして」(伏屋、四)

「おぼしめして おんなみだ せきあへず」(秋月、三)

「おもひも よらぬ ことなり」(秋月、三)

「これには いかで まさるべき」(秋月、三)

「すぎさせ たまふ ほどに」(伏屋、四)

「その ことと なく」(住吉、四)

「たとへむ かたも なし」(秋月、四)

「なみだを ながし たまへば」(秋月、八)

「ゑぼしを ちに つけ」(秋月、三)

などである。

これらの中には「そのこととなく」(住吉)、「これにはいかでまさるべき」「すぎさせたまふほどに」(伏屋)のように、その物語独特と思われる言い回しが見られる。しかし「あかしくらしたまふほどに」(住吉)「いとどあはれぞ

まさりける」(秋月)などは、一般的な言い回しで、たまたま他の二作品に出て来なかっただけであるとも考えられる。「なみだをながしたまへば」は、秋月に八例も出て来るのに、どうして他の二作品に出て来ないのか不思議でさえある。

ともあれ、注目すべきは、異作品間の同一表現である。「表Ⅱ」によると、秋伏共通が四五で最も多く、住秋が七、住伏は五となっており、これは物語間の親近度を示す数値とも言えそうである。

まず、三物語に共通する文節二例を挙げる。

「たまふ こと かぎりなし」(住二、秋九、伏二)

「まうし たまふ やう」(住一、秋四、伏二)

右の二例では特徴を云々することは出来ない。そこで、二物語間に共通する五十七例(所属文節一五二)を分析してみよう。「表Ⅰ」で五五十一に分けた物語の筋の展開を、次の五段階に分け、それぞれの段階に同一文節がどのように分布しているかを見ることにする。

〔1〕女主人公が継母と同居するまで。(二)～(一一)

〔2〕男主人公の登場と求婚など。(一二)～(三二)

〔3〕継母の奸計と女主人公の失踪。(三三)～(三七)

〔4〕男主人公の女主人公を求める旅と帰京。(三八)～(四六)

〔5〕主人公夫妻一家の栄達と周囲のその後。(四七)～(五五) (56)

〔表Ⅲ〕のごとく、一応万遍なく分布している様子を呈しており、特にどの部分に同一文節が集中しているということはない。『秋月』と『伏屋』の(4)が多いのは、叙述の分量が多いからであり、頁あたりに換算した概数を()内

に示したが、これによるとむしろ書き出し部分と終末部分に、類型的表現が多いという傾向が見出される。また、『住吉』よりは、室町時代の二物語の方が類型表現度が高いと言える。

具体例を二、三挙げる。(数字は表Ⅲの段階を示す)

「むかしも いまも まことならぬ」(住吉1、秋月1)

「もし いまだ このよに」(秋月4、伏屋4)

「いまだ このよに ありと」(秋月4、伏屋4) (*前の例とは別の箇所)

「きかい かうらい けいたんこく」(秋月4、伏屋4)

「だいしやうに なり たまふ」(住吉5、秋月5)

右は、同じ段階に表れた同一文節を挙げたのであるが、これらは物語の根幹的ストーリーの叙述に関わる表現である。これに対して、

「こがねの さかづき とりそへて」(秋月3、伏屋4)

「おんふみは ひまも なし」(秋月4、伏屋2)

「さめざめと なき たまへば」(住吉2、秋月4)

のように、別の段階に表れる同一文節は、主語が別人であったり、状況が別であって、たまたま描写が同じといった場合である。これらの分析方法は今後の課題としたい。

次に、同文節の表れやすい、言い替えれば表現が類型化しやすい描写とそうでない描写とが存在するかどうかを調べるため、「表Ⅳ」を作成した。これは、同文節索引で検索された「表Ⅱ」の二九五を、自然描写・行動描写・心理描写・状況描写(説明的叙述)・会話と和歌、の五つに分けて一覧できるようにしたものである。これによると、自

然描写の類型度が予想より低かった。もっと多くの物語についてデータを集めなくては、傾向の分析は不可能であるが、方法論確立への提言のつもりで掲げた。

四、類似表現の考察

パソコンは、受けた命令通り忠実正確に処理をする。しかし、人間のように気を利かすことは一切してくれない。(英単語のスペルを直してくれる英文ワープロも出ているが、あらかじめ誤まりのパターンを教えこんである) したがって、前章で用いた同文節一覧は、文字通り全く同一文節が三・七並んだものだけを検索しタイプアウトしたものである。だから「ことち 立てなをして ひき 給ふに」(伏屋)と「琴ぢ たてなをし つまをと けたかく 引 給ふ」(秋月)とは、一二文節同一の中にすらカウントされないものである。しかし、右の二例が類似表現であることは誰しも認めるところである。そこで、こうした類似表現を、三物語を見通して簡単に見つけられる便利な『住吉・秋月・伏屋物語対照文節索引』を作成した。これもパソコンのお蔭で何の苦もなくプリントアウトの時間だけで出来る。(一部分を稿末に『参考Ⅱ』として掲出した。『住吉』のみ一段組みのため、他と揃える必要上八〇頁が四〇㊦となっている) 自分のために作成した天下一本の索引である。この索引を用いて、以下の考察を進める。

(一) あそばす

「あそばしけり」「あそばせ」など、動詞「あそばす」の文節は四八ある。内『伏屋』は五例、『住吉』は零である。「す」「ものす」のように代動詞(敬意を含んでいる)として広く用いられ、「……みつっきの あらはつかし／＼と、

すわうのためかみに、あそはして、ありけるを」(伏屋)、「……あはれともしれ かやうにあそはして、ひきむすひ」(秋月)のように、「書く・染筆する」の意のほか、誦経する、演奏する、歌を詠む、などの意に用いてある。

ここで注目すべき点は、『住吉』だけでなく、尊敬閣文庫本『伏屋』にも「あそばす」が一例も見当たらないことである。このことは「あそばす」の語誌研究にヒントを与えてくれるようだが、本筋から外れるので、ここでは慶応本『伏屋』と『秋月』との親近性、『住吉』との疎遠性を指摘するにとどめる。そのほか、「あら」(感動詞)、「あられなし」(安穩なり)「いかさま」「おんいたはし」など形容詞に御をつける用法「冥加なし」など、いわゆる中世語が『伏屋』『秋月』には見られるのに対し、『住吉』には用いられていない点にまず注目しておく。

(二) 岩木ならねば

稿末〔参考Ⅱ〕に示したごとく、合計七例の類似表現が見られる。かつて磯部貞子氏(注9)が、『住吉物語』の一つのクライマックス場面すなわち、はるばる住吉海岸まで訪ね来た少将に外聞を気にする姫君が面会を拒む場面でのキーワードを「もののあはれを知り給へかし」と「物の心なきは岩木になん」という尼君の台詞であると指摘されたが、人間としての情味を強調する常套語句として「岩木ならねば」がある。古典対照語い表によると十四作品中四作品に見られるのみで、万葉集の例はびつたりしないので除くと、伊勢物語一、蜻蛉日記二、源氏物語二で決して多いとは言えない。加えて宇津保物語に「いみじきいは木・おにの心なりとも、きゝては涙おとさゝらんやときこゆ」(楼上下)の一例を見出したのみである。こうした状況の中で、『住吉』の三例は決して少ない用例数とは言えない。『住吉』の特徴語の一つである「岩木ならねば」が『秋月』に三例、『伏屋』に一例見られることは、その影響関係を証明する一助となろう。(『平家物語』(高野本)にも「岩木」は五例あり、内三例は人間としての情味を持つ描写に用いられ

ているから、中世では一般化した表現となっていたとも考えられるが。

(三) 袖をかほにおしあてて

前章で用いた同一文節一覽では、三文節同一のところに「そでを かほに おしあてて」(住吉二例)とある。ところが、三物語対照文節索引を見ると、『住吉』には、その他に「袖をかほにおしあて」「袖をかほに押あて、その二例が加わる。また、『秋月』には、「なをしの袖をかほにあて」が『伏屋』(尊経閣本)には「かほに袖をひきあて、」

「袖をかほにをしあて、」の二例が見える。

「袖をぬらす」「袖をしほる」は、この三物語にも計十七例見え、その他の作品にも一般的な表現である。しかし、「袖を顔に押しあてて泣く」という表現は『住吉』の特徴の一つと言え、それを『伏屋』『秋月』が受け継いでいるように思われる。

(四) 女郎花の露おもげにて

『住吉』では、女主人公の姫君の八歳の時の様子を「ふた葉の小萩露おもげ也ければ」と描写し、筑前の少将への報告の台詞中に姫君(十四五歳)を評して「女郎花の露おもげにて籬のほとにたふれふしたる心ちして」と述べている。

これとよく似た表現が『秋月』にもある。やはり女主人公を「御すかた、秋の野、おみなべしの、露おもげなるさま」と描写し、また「姫君は、いと、露をもけなる御ふせひ」とある。母に先立たれ悲しみに沈む姫君の描写としてふさわしい表現であり、このような場合の常套語と言えなくもないが、『秋月』が『住吉』の影響を受けているこ

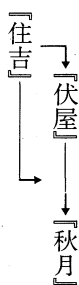
との一つの証左とも見られる。なお『伏屋』にはこれに類する描写は見えない。また、『源氏物語』にも「露」は八十七例（副詞用法を除く）あるが「露おもげ」と続く例はない。やはり、『住吉』の特徴的表現で、『秋月』が踏襲したと見たい。

他にも注目したい語句はあるが紙面の都合で割愛する。

むすび

パソコンを用いての文節比較による、物語の類似性考察は、まだ緒についたばかりで、方法論的に確立されていない。本稿も、中間報告にすぎない。

しかし、以上の未熟な考察においても『住吉』『秋月』の類似性は明らかになったし、



という成立過程もほぼ証明できたように思う。

（平成七・十・十稿）

注

- （１） 現存『住吉物語』を、鎌倉時代の改作とする通説に対して、稿者は『枕草子』に「物語は、住吉・宇津保……」とあり、『源氏物語』〈蜩〉に「住吉の姫君のさし当りけむをり……」とある平安時代の住吉と根本的差違はないものとの考え方に立っている。
- 『住吉物語』の描写時代（昭60・3、嵯山文学9）など一連の拙稿参照。

- (2) 一般的には、室町期の御伽草子の一つに数えられている。桑原博史氏は『住吉物語』とまったく同じ筋立てに、『ふせやの物語』の、亀の出現で危急の姫が救われるという趣向を加えた（『日本古典文学大辞典』とされる）。
- (3) 御伽草子と統括される。尊経閣文庫蔵写本奥書に、「明応八年^{己未}八月五日」とあり、それ以前の成立。徳田和夫氏は、「王朝物語風の恋愛小説ともなっており、また、本地物の性質もあつて、平安朝以来の物語と室町期のそのの両方を兼ね備えたもので、時代意識の反映が如実に見られる作品」（『日本古典文学大辞典』と述べておられる）。
- (4) 桑原博史氏著『中世物語研究——住吉物語論考——』（二玄社、昭42・11）
- (5) 武山隆昭編『住吉物語（契沖本）校本文節索引』（私家版、平成7・9）の本文編による。
- (6) 武山隆昭編『秋月物語文節索引』（私家版、平成5・2）の凡例に記した如く、誤字と思われる部分を最少限度修正した本文を用いた。
- (7) 武山隆昭編『二本対照伏屋物語文節索引』（私家版、平成6・11）の本文編（慶應義塾図書館蔵『伏屋の物かたり』の推定補訂版）による。
- (8) K W I C 索引作成用・同文節検索用のパソコンプログラムは、名古屋大学村上學教授開発のものを、氏の御厚意で使用させていただいた。記して謝意を表する。
- (9) 磯部貞子氏著『尾州徳川家本住吉物語とその研究』（笠間書院、昭50・2）

*本稿は名古屋平安文学研究会平成七年四月例会で発表した内容に手を加えたものである。席上御教示くださった諸氏に感謝申し上げます。

参考I 住吉・秋月・伏屋物語の同一文節一覽(降順)抄

- 7 文節 はなの たもとへを ひきかへて きき すみそめに なを なし、いかならん 山の をくにも、引こりなんと、
 花の 杖を、ひきかへて、きき すみそめに なを なし、
 世三と 由に、花の 杖を、ひきかへて、きき すみそめに なを なし、
 ●合計 2 504 ㊦ 9
 ●7 文節 みやこに おはします やはた まつのを かも かすが いなり
 きてつ「一は、みやこに おはします、や□□□□わう、かも、かすか、いなり、きおんに、まいらせ□□□□の、
 しなむ三世の、しよふつによらい、みやこに おわします、や」わた、まつのお、かも、かすか、いなり、すみよし、きた」の、てんしんも、
 おはしめて 伏屋 508 ㊦ 2 伏屋 あはれと、
 ●合計 2 153 ㊦ 15
 ●5 文節 あはれを もよほさずといふ、こと なし
 かんるい なかし、哀を「もよほさずと、いふ、事 なし、さて 姫君、てうしを かへ、
 御にぬ、いとおくらす、哀を 催さ」すと、いふ、こと なし、」さても 中將は、都の こと 伏屋 187 ㊦ 17
 ●合計 2 伏屋 195 ㊦ 15
 ●5 文節 おんおもかげ みに そふ、ごごちして 御涙、ひまも なし、いつ 伏屋 182 ㊦ 3
 父 大納言の 御「面影、身に そふ、心ちして、御涙、かたり慰人も なし、」ひとりごとのみにて 伏屋 182 ㊦ 3
 おはします「さて、御面影、身に そふ、心ちして、御涙、かたり慰人も なし、」ひとりごとのみにて 伏屋 182 ㊦ 3
 ●合計 2 伏屋 182 ㊦ 3
 ●5 文節 こそいかうの おはぐち きて しげどうの ゆめ
 煤の丸の 直垂「に、こそいかうの、大口 きて、重藤の 弓」持て 候は、あねかきか子、
 煤の丸の 直垂、こそいかうの、大口 きて、重藤の 弓「持て 候は、あねかきか子、
 ●合計 2 伏屋 206 ㊦ 5
 ●5 文節 なみだを ながしたまへば みうち の ひとびと
 おなし 御心ならはとて、涙を なかし 給へば、御「内(ルビみうち)の 人人、御理と」申ける」去程に、中將の
 「うせ 給ふとて、涙を なかし 給へば、御内の 人人、御理と」申ける」去程に、中將の
 ●合計 2 伏屋 227 ㊦ 12
 ●4 文節 あはれを もよほさずといふ、こと
 かんるい なかし、哀を「もよほさずと、いふ、事 なし、さて 姫君、てうしを 伏屋 187 ㊦ 17
 鬼神「魔王なりとも、哀を もよほさずと、いふ、こと、あるまし、又」諸天明王も、 伏屋 189 ㊦ 3
 御にぬ、いとおくらす、哀を 催さ」すと、いふ、こと なし、」さても 中將は、都の こと 伏屋 195 ㊦ 15
 ●合計 3 伏屋 189 ㊦ 3
 ●4 文節 いづへ ゆくべき かたも なし
 此書に、いづへ行くへ 行へき かたも なし、あんの はしなりとも、御借 候へ」と、そこには、
 いひける、いづへ 行へき かたも なし、さすか「岩木ならねは、さのみ、そこには、
 ●合計 2 伏屋 183 ㊦ 5
 伏屋 185 ㊦ 6
 ●5 文節 てんに あふぎ ちに ふして
 ゆめ 給ふらんとして、天に あふぎ、ちに ふして「ゆくゑをたにも、しるならば、いかなる、ひの 伏屋 158 ㊦ 3
 曇りし、帰るへきやとて、天に あふぎ、ちに ふして、きえ入はかりにて、願は 諸天の 御はからひに、
 どりたると 心へて、てんに あふぎ、ちに ふして、ち、は、の、なかなしむ 給ひければ、
 ●合計 3 伏屋 514 ㊦ 9
 ●3 文節 かしづき たまふ、こと
 をはしけり、かしてなし、かしつき 給ふ、事「か」きりなし、御かたち よに すくれ、 伏屋 136 ㊦ 13
 しやそき、だてまつりて、給ひ、限な」こと、彼 姫君、をとに 姫君 もろどもに、 伏屋 163 ㊦ 3
 世に、しらすかし」つき 給ふ、こと 年をふる はとに、たくひなく 伏屋 182 ㊦ 11
 給ひけり、ま、母」かしつき 給ふ、事 限なし しん殿の 東面に 住せければ、 伏屋 1 ㊦ 8
 ●合計 5 伏屋 7 ㊦ 9

『住吉物語』と『秋月物語』・『伏屋物語』

参考Ⅱ 住吉・秋月・伏屋三物語対照文節索引 抄

あそばし	」そでの うへかは」と あそはし、 ひきむすひて、 たひければ、 たまはりて、	秋月 ① 138 ㊦10
	さりなから 』ふみ あそはし 候へ、 又、 申込みと、	秋月 ① 144 ㊦1
	」さらは、 あいし、 あそはし 候へと、 ありければ、 わらはか	秋月 ① 149 ㊦5
	な」みに、 たちわかれけむ」と、 あそはし おはしけり 』」さて、 大納言は	秋月 ① 161 ㊦9
	、 法花経の ハの巻を あそはし、 南おもてに むかひ、 』ふたらくせんを、	秋月 ① 194 ㊦3
	よもすか」 御経 あそはし 』南無大慈大悲の観世音、 ねかはくは、 姫君、	秋月 ① 194 ㊦18
	法花経 一部つゝ、 あそはし、 あいき」やうの 御ために、 ゑかうの	秋月 ① 195 ㊦14
	」あとそ さひしき」と、 あそはし 給へは、 尼うへ、 とりあへず	秋月 ① 231 ㊦11
あそばしけり	得ず、 さまさまに、 あそはしけり、 今夜の 笛、 琴のねに」は、	秋月 ① 187 ㊦14
	」一かさねに、 一て、 あそはしけり 』きよみつの、 そこにて 君を、	伏屋 498 ㊦13
あそばしける	ちから なくて、 あそはし」ける 』しらかは、 文 給りて、	秋月 ① 140 ㊦3
	御こゑにて、 かくそ、 あそはし」ける 』君か いふ、 人は	秋月 ① 165 ㊦16
	五の巻の、 四十八しやうをそ、 あそはし」ける 』どくしゆの	秋月 ① 177 ㊦18
	笛にて 』歌をそ、 あそはしける 』都より、 波路 はるかに、	秋月 ① 186 ㊦12
	笛にて、 かくをそ あそはしける 』さ夜 ふけて、 東西	秋月 ① 187 ㊦1
	おほして、 中將 あそはしける 』百とせに、 また 百とせを、	秋月 ① 198 ㊦2
	」又 ひめきみ、 あそはしける やう 』やまふしの、 ころもを	伏屋 529 ㊦8
あそばしけるぞ	御経 たつとく、 あそはし」けるぞ 哀なる 』さて 都には、	秋月 ① 160 ㊦14
あそばしけるを	給へる ところを、 あそはしけるを、 愛子、 見 給ひ」て、	秋月 ① 147 ㊦7
あそばしけれ	あらね」は、 かくこそ あそはしけれ 』あさ ゆふの、 露のみ	秋月 ① 144 ㊦6
あそばしければ		
いはかど	行、 道也、 岩かと、 高く して、 風	秋月 ① 203 ㊦9
いはかどにて	通り 給ふに、 岩かとにて 』足を きり、 なかるゝ	秋月 ① 203 ㊦12
いはきならずは	思ひにてそ あらまし 岩木ならず {は} 見 』たまへかし あな	住吉 38 ㊦6
いはきならねば	あら 』心くるしや、 いはきならねは、 又 申 給へかしと、	秋月 ① 145 ㊦9
	さすかに、 ものゝふ」も、 いわきならねは、 哀に 思ひ 奉りて、	秋月 ① 159 ㊦16
	なし、 さすか 』岩木ならねは、 さのみ、 そとには、 いられはこそと、	秋月 ① 185 ㊦7
	」ものゝふ、 さすかに、 いはきならねは、 なみたを なかして」なん、 よめへ	伏屋 504 ㊦14
	(ママ)り	
いはきならねばとて	おほしたるにやと きこゆれば 』岩木ならねはとて 哀けに おほしたり	中將は
		住吉 28 ㊦10
いはきになむ	心 なきは 』岩木になん 是程の ことには ゆるし	住吉 31 ㊦3
いはきの	ほとに、 人」も、 いはきの 身ならねは、 こゝろへられぬ、	伏屋 510 ㊦14
いはく	のたまへは、 おきな いはく 』まつかけの、 いろも ときはの、	伏屋 526 ㊦18

そでも	あらんには おほし出なんやと 袖も 所せく の給へは あな 住吉 21 ㊦ 2
	物をと」て 墨染の 袖も しほる斗にそ 有ける さて 住吉 22 ㊦ 12
そでを	なみたに ぬ」れて、 そでも かは□□」つりふねの、 けに 伏屋 510 ㊦ 10
	」給へは なほしの 袖を ひかへて 行へも しらぬ 住吉 2 ㊦ 3
	姫君も 侍従も 袖を かほに おしあてゝ 泣るたり 住吉 13 ㊦ 7
	わか はくゝみし」袖を とひなんと つまに 書つて 住吉 13 ㊦ 6
	侍らんとて 式人ながら 袖を かほに (おし)あて しほる斗なり 住吉 19 ㊦ 9
	」ことの 心うさ(よ)とて 袖を かほに 押あてゝ せ なかれける 住吉 23 ㊦ 9
	過しかと かはかり 袖を 」ぬらしやは せしなと いひて 住吉 24 ㊦ 1
	しかしかと」語りて 袖を かほに おしあてゝ 泣 住吉 27 ㊦ 5
	帰り」なんと いへは 袖を ひかへて おはする 所を 住吉 28 ㊦ 7
	見 給ひ」て 袖を ひかへて」たつねかね しらぬ 住吉 28 ㊦ 6
	大納言殿の なほしの 袖を ひかへて うちへ」引入て 住吉 36 ㊦ 8
	ふみかへし、 いくたひ 袖を、 ぬらすらん、 おもひ」を 人に、 秋月 ㊦ 148 ㊦ 5
	しつのを、 しつのめまでも、 袖を しほらすと いふ こ」と 秋月 ㊦ 158 ㊦ 7
	せきあへず、 女房達も 袖を しほり 給ふ」愛子は、 秋月 ㊦ 165 ㊦ 1
	うちあるして、 なをしの 袖を、 かほに あて 給へは、 秋月 ㊦ 165 ㊦ 11
	打詠して、 くわしやか 袖を、 ひかへて、 いづくへ、 お」はしまし 秋月 ㊦ 181 ㊦ 13
	御前の 人人、 袖を しほらぬは、 なかり」けり」やゝ 秋月 ㊦ 189 ㊦ 15
	覺」すとして、 なをしの 袖を、 しほり 給ふ」やゝ 秋月 ㊦ 223 ㊦ 6
	人々に 至まで、 袖を しほらぬは なし、」大將、 秋月 ㊦ 223 ㊦ 9
	御」内(ルビみうち)の 人人、 袖を しほらぬは なし」去程に、 秋月 ㊦ 224 ㊦ 11
	候へとて、 墨染の 袖を、 しほりつゝ、 姫君の 御袖を、 秋月 ㊦ 231 ㊦ 18
	みなみな、 からきぬの」袖を ぬらしける」さて 姫君、 秋月 ㊦ 231 ㊦ 2
そでをぞ	給ひて、 墨染の(ママ) 袖を、 ぬらし 給ひぬ、 さて 秋月 ㊦ 231 ㊦ 14
	よみて、 たかひに そでを、 ぬらし たまひて、 すきさせ 伏屋 497 ㊦ 5
	なかし、 とともに そでをそ、 しほりける、 しは」し ありて、 伏屋 506 ㊦ 10
	うれしきにも、 つらきにも、 そでをそ、 ぬらし たま」ひけり」ひめきみ 伏屋 529 ㊦ 13
つゆ	』ふた葉の 小萩 露 おもけけれは めのと とかく 住吉 2 ㊦ 1
	おろかにこそ 女郎花の 露 お」もけにて 籬の ほとに 住吉 5 ㊦ 1
	思ふらんと おほ」すにも 露 まとろみ 給はぬも わりなしや 住吉 8 ㊦ 1
	八月よりの ことをは 露 しらさりけるよとて さめさめと なき 住吉 16 ㊦ 4
	野へ、 おみなべしの、 露 』おもげなる さま、 うちしほれたる、 秋月 ㊦ 136 ㊦ 18
	はうへの 御事、 露 」ほども、 わすれ たまはず、 秋月 ㊦ 136 ㊦ 13
	こと、 なとや 露 ほども、 きゝ 給ひ 秋月 ㊦ 145 ㊦ 8
	たてまつれども、 姫君、 露 ほども、 くつろき 給ひ 秋月 ㊦ 145 ㊦ 16
	姫君」は、 いとゝ 露 をもけなる 御ふせひ、 まことに、 秋月 ㊦ 156 ㊦ 5
	これなる 花の、 露 をもけな」る いたひけさよとて、 何心なく、 秋月 ㊦ 157 ㊦ 10
	あり」きゝしより、 露 おもけなる、 なてしこを、 はつ秋かせに 秋月 ㊦ 161 ㊦ 4
	命は、 草案の 露、 風の まへの ともしび、 秋月 ㊦ 180 ㊦ 15
	うしなひて 候へ共、 露 ほども ふ」ひんと 思ひたる 秋月 ㊦ 185 ㊦ 14
	」さて 尼公は、 露 ほども、 わひしめ まいらせしと、 秋月 ㊦ 194 ㊦ 8
	かういろの 直垂、 露 たかく むす」ひ、 大ほしの 秋月 ㊦ 212 ㊦ 14
	じやうらうは、 何とや、 露 おもけ」なると、 の給へは、 長者、 秋月 ㊦ 217 ㊦ 13
つゆけかりける	けに あさましく 露けかりける」我 袂かなと 書て 住吉 14 ㊦ 9